

産経新聞 東京版 朝刊
平成28年(2016年)5月27日 金曜日

産経新聞

<第三種郵便物認可>

成人ぜんそく 新たな治療法に脚光

成人ぜんそくは、空気の通り道となる気管支が慢性的な炎症によって狭くなる病気だ。発作を起こすと激しくせき込み、最悪の場合は呼吸困難に陥り、死を招く。

厚生労働省が実施した平成26年の患者調査によるところ、ぜんそくの総患者数は約120万人。また、20歳以上の成人患者は推計患者数全體の半数以上を占めた。「せきがちっとも治まらないけど毎日忙しいし……」などと治療せずに放つておるのは危険だ。国内では年間1550人(厚労省「平成26年人口動態調査」)がぜんそくで命を落としている。

「成人ぜんそく」で問題になるのは完治が難しく、年齢が上がるほど死亡リスクも高まる。日本アレルギー学会によると、ぜんそくによる死者数は減少傾向にあるものの、65歳以上が占める割合は88・5%。(23年)と極めて高い。

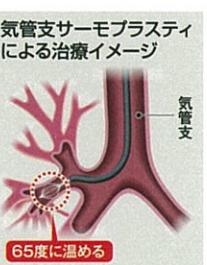
神奈川県立循環器呼吸器病センター呼吸器内科医長の馬場智尚さんによると、小兒ぜんそくは成長とともに治ることもある。ところが、「成人ぜんそくは何歳で発症し、要因がはつきり

夜中にひどいせきで目が覚めてしまつ、運動をすると息苦しい。その症状はぜんそくかも。子供の病氣と思われがちだが、大人になって突然発症することもあり、小児より成人の患者数が多いという。最近は「成人ぜんそく」に苦しむ患者の新しい治療法も登場し、注目を集めている。

(金谷かおり)

しないことも多い」とい
う。熱がないのにせきやん
が治まらない▽夜中や朝方
にゼーゼーと呼吸音がして
息苦しくなり眼れない▽走
ったりするとせきが出る▽
などの症状があれば、早め
に医療機関を受診したほうがいい。ぜんそくと診断された場合、吸入ステロイド薬と飲み薬を組み合わせ、発作を起さないようにコントロールする治療法が一般的だ。

最近では重症患者向けの新しい治療法も広がりつつある。「気管支サーモプラスティ」と呼ばれ、気管支を温めることで症状を緩和する。昨年4月から健康保険の適用になった。



横浜市の主婦、小野三子さん(69)は子供の頃からぜんそくに悩まされてきたが、従来の治療では症状を十分に抑えることができず、主治医から紹介されて昨年「気管支サーモプラスティ」を受けた。「不安もありましたが、治療中は麻酔が効いていたので痛さを感じませんでした」。

せんそくの患者は、持続熱が無いのにせきやんが治まらない▽夜中や朝方にゼーゼーと呼吸音がして息苦しくなり眼れない▽走ったりするとせきが出る▽などの症状があれば、早めに医療機関を受診したほうがいい。ぜんそくと診断された場合、吸入ステロイド薬と飲み薬を組み合わせ、発作を起さないようにコントロールする治療法が一般的だ。

この治療法は、気管支鏡(内視鏡)を口や鼻から挿入し、先端から電極の付いたカテーテルを出し、高周波電流で気管支の内側を65度で10秒間温めることで、これにより肥大した平滑筋を正常な状態に近づけ、発作などのつらい症状を緩和する。

この治療法専用の医療機器を扱うメーカー「ポストン・サイエンティフィックジャパン」(東京都中野区)によると、すでに国内40の医療機関(4月末時点)に導入され、「結婚や妊娠を考えている女性の患者で(薬を減らせる)この治療を希望する人もいる」という。



「気管支サーモプラスティ」の仕組みを、気管支の模型を使って説明する馬場智尚さん